

氏名	堤 光 仁
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 授 与 番 号	乙 第 1478 号
学 位 授 与 の 日 付	昭和59年 9 月30日
学 位 授 与 の 要 件	博士の学位論文提出者（学位規則第 5 条第 2 項該当）
学 位 論 文 題 目	The inhibition of substance P-induced histamine release from mast cells by 6, 7-dihydro- 6, 8, 8, 10-tetramethyl- 8 H-pyrano [3, 2 -g] chromone- 2 -carboxylic acid (EAA)(肥満細胞からのsubstance P 誘発性ヒスタミン遊離の6, 7-dihydro- 6, 8, 8, 10-tetramethyl- 8 H-pyrano [3, 2 -g] chromone- 2 -carboxylic acid (EAA) による抑制)
論 文 審 査 委 員	教授 産賀敏彦 教授 小田琢三 教授 木村郁郎

学位論文内容の要旨

新規に合成された抗アレルギー薬 EAA のヒスタミン遊離抑制作用の様式を, substanceP による肥満細胞からのヒスタミン遊離の系を用いて, アルカリ土類金属イオンとの関係において追求し, また disodium cromoglycate (DSCG) の作用様式と比較した。その結果次のような成績を得た。(1) EAA のヒスタミン遊離抑制効果の用量反応曲線は細胞外 Ca^{2+} の存否にかかわらず逆 bell 型であった。(2) EAA は, 最大のヒスタミン遊離抑制効果を発揮するために, 媒液中にアルカリ土類金属イオンの存在を必要とするが, DSCG と異なり Ca^{2+} に対する特異的な要求は認められなかった。(3) EAA の効果には DSCG と同様に tachyphylaxis が発現し, また, EAA と DSCG の相互間には cross tachyphylaxis が認められた。以上の成績から EAA の作用様式と DSCG の作用様式との類似点と相違点について考察した。

なお, 本論文は共著論文であり, 共著者の協力を得て完成したものである。

論文審査の結果の要旨

本研究は新合成抗アレルギー薬のヒスタミン遊離抑制作用に関する研究であるが, サブスタンスPによる肥満細胞からのヒスタミン遊離の系によって抑制作用を研究し, そ

の抑制様式について重要な知見を得た価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。